

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第17号
2003年12月

目次

若き良き友に — 福田有広会員をおくる	
佐々木 武	1
書評	
〈民族〉の由来と帰趨 — 瀬戸一夫著『時間の民族史』を読む —	
柴田 平三郎	3
研究会記録	
日韓政治思想学会第2回共同学術会議	10
論文公募のお知らせ	11
理事会記録	13
理事候補・代表理事選出規定	14
2004年度研究会プログラム（予定）	15

若き良き友に — 福田有広会員をおくる

佐々木 武 (東京医科歯科大学)

11月17日月曜日遅く帰り着いたら、二通のファックスが入っていました。一通は平石直昭さんから、もう一通は犬塚元君からのもので、時間のズレはありましたが、いずれも貴君の急死を告げていました。後で知らされたことですが、木庭顕先生も僕に何度も電話で知らせようとしたが、通じなかったとのことでした。月曜は一日フルに働く日で、夕方、学長と一時間程話して「エライひと」と接するのは苦手で、気分転換に学内で貴君と二度ぐらい夕食を共にしたことのある、あのレストランで食事をしていたら、精神科と心臓外科の教授とバッタリ出会って、話題はもっぱら脳と心臓のことになって、「救急救命」の日本での遅れに話が及びました。その一週間ぐらい前に、僕はトップが代わって静岡県立病院にトバされた僕の前の主治医をたよって5年ぶりの心臓の精密検査を受けたばかりでした。そんな時に「心不全」による貴君の急死を知らされたのです。僕のこころの中にポッカリと穴があいて、頭の中がカラッポになった感じで通夜と告別式の日時だけ、たしかめただけでした。

12日水曜、午後3時からの19番教室での木庭教授の特別講義「ギリシャ・ローマの政治思想」の一分ぐらい前に教室に急いで入ったら、席は全部埋まっていた、ドアを開けたトタン、張りつめた空気がドッと押しよせて、この年になると動じることはなかったけど、近頃では珍しい得がたい緊張感を味わいました。その時チラッと横に目をやったら、貴君の未だ少年の面影を残した笑顔の表情に気づきました。僕は壁際の補助席のようなところに席を得たのですが、100分のあの授業は疲れます。クラスがおわって犬塚君と新刊のヒューム研究のことで立ち話をしていたら、なぜか、いつもすぐ次の貴君自身のクラスのために居なくなるのに居残ったまま隣りの若者と話しをしているのが視野に入って、いつにない風景なので妙に印象に残りました。今となっては、それが貴君を目撃した最後の数分でした。どこかで誰かがそういう“別れの瞬間”を作ってくれたのでしょうか。その次の水曜日が貴君の告別式になったのですから。

通夜に出かけて、貴君の師匠に目礼して、木庭教授と二人のお弟子さんと途中まで一緒したのですが、木庭先生は明日の告別式には総長は出れないから弔辞をよんでくれと頼まれた、それで文章を打っていたら、涙が出てきて先生の貴君に対するシンパシイがこんなにあったのかと驚いたと述懐されていました。僕はといえば、貴君の死は「確認」しないときめていましたから、感傷めいたものはなく、明日の告別式には出ませんからといったら、先生の方から僕が弔辞を読むのだから出ろということで出ることにしました。「表参道」で途中下車して、「クレヨン・ハウス」の地下で自然食の軽い夕食を食って、宮益坂を下って渋谷に出ました。福田良子夫人に通夜の報告を電話ですませて、早朝まで、もう二年近く落ち入っている‘mysterious sleeplessness’（これは合衆国の医療社会学者、レネー・フォックス先生がそう名づけてくれたものです。）状態の後の、短かい眠りがあって、告別式には間にあいました。貴君の先代の師匠と総長とが並んで坐っていて、祭壇に貴君が横たわっているというのは「死」が「順不同」とはいえ、あいさつする気にはなりません。僕は貴君の死を確認するために来たのではなく、木庭教授の弔辞を拝聴にきたのです。書くのがしんどかっただろうなあ実感できる簡潔なものでしたが、出棺の際にかい間見た貴君の師匠の横顔を思い出すにつけ、あの日は夜遅く帰り着いたのですが、もう気分がチーンとしずんでしまっていて、どこかで貴君の死を実感していた様です。なんで、こんなこまごまと書くのだろうかと思うのですが、この3日間を反芻することで、僕自身を納得させようとしている様です。それぐらい突然の出来事だったということでしょうか。まあカンベンして下さい。

学問上のつきあいは、たまのことでしかなかったけど、それだけにひとつひとつ憶えています。『オシア

一ナ』のテキストの不明部分をきかれて、ペイクナム版の原本とストリータ版のコピーと、パロン編のブルーニのテキストの戦後リプリント版を貸したのが、最後だったでしょうか。88年春「卒業旅行」の途中にたづねてこられて、ケンブリッジで2回会いましたね。1回目の時はブレア・ウォーデンの名前をあげて、2度目は、クレア・ホールで彼のおごりでランチを共にしながらジョン・デイヴィスに紹介した時。それから数日後、ヒースロウからフライト直前に投函された礼状が届いて、デイヴィスに会えたのは「オペラ座の怪人」より良かったと書いてあったのには、笑ってしまいました。僕の台所兼食堂兼居間兼仕事場は、もう本に埋まってしまって歩行もままなりません。貴君がくれた二枚の貴君の写した写真を使った絵ハガキがはってあります。一枚はマキャヴェリの旧居のあった辺りからとったポンテ・ヴェッキオのかかったアルノ河の日落。もう一枚はセント・エドモンド・ホールの内部から中庭を窓越しに写したもの。光線にあたって色あせつつありますが、貴君のカメラ・ワークは大したもの。今はそのとなりに、「朝日」夕刊に載った貴君の師匠の総長に選出された直後の顔写真がピンナップされてます。僕はくちびる噛んだ彼の表情が大好きなのです。

貴君の死がいつだったのか、医師である貴君のパートナーが当直をおえて朝もどられたら、フトンのなかで亡くなっていたとか、伝えきいているけれど、その時が10時半。明方か早朝か、知る由もありません。貴君の死を「確認」するつもりは、全くありません。

Sovereignty and Sword(1997)に結実した貴君の最初の傑作は最後のものとなってしまったけれど、バージェスの僕が訳した書評が言うごとく、「必読の書」です。あの訳文の感想を求めたら「ハグレものの共和主義者」は良かったですねと言いつてくれたけれど、あそこは僕なりに工夫した個所だったので、ホッとしました。貴君の死を伝えた犬塚君へのJohn RobertsonからのEメールの返信には‘unusually original in its reading of the relationship between Hobbes and Harrington’とあります。正にその通りです。僕が貴君の仕事の中に予感していたもの(‘cannot see, but can feel.’ HarringtonのPolitical Aphorismsから一行を借りればこうなります。)も‘unusually original’でした。HarringtonからMachiavelli、それからLiviusへとたどりついたところで、その成果の一端を準備中に突然襲った死でした。貴君の「政治学史講義プリント」(1998年度夏学期)は、貴君のヴィジョンを予告しています。貴君から送られてきた「プリント」のコピーには、私信が付いていて、「私の政治学史全体に関するperspectiveがここに書かれている・・・」(1999.4.6)とあります。

「どんなにいい仕事をして、誰れも迷惑しないよ。」これは貴君が一番気に入ってくれた、僕の言葉でした。たまにしか会わなかったわりには、以心伝心で、お互い理解しあっていたのかもしれませんが。ここでペンをおきます。少年の面影を残した貴君の笑顔を僕の脳裏に焼き付けて、ストップ・モーションの手法でエンド・マークにします。

The good die young.

2003年11月24日午前1時20分 記。

(付記：福田有広会員が在籍していたオックスフォード大学セント・エドモンド・ホールが校旗を半旗にして公式に哀悼の意を表したとの知らせが関係者を通して伝えられました。 編集部)

〈民族〉の由来と帰趨 — 瀬戸一夫著『時間の民族史

— 教会改革とノルマン征服の神学』(勁草書房、2003年)を読む —

柴 田 平三郎 (獨協大学)

恐るべき書物が出現したものだ、というのが一読後の率直な感想である。それ以外に適当な表現が思い浮かばない。

この感じはしかし、本書をまだ読んでいない人に理解してもらうのにはなかなか難しい。なぜだろうか。その理由をあれこれ考えてみるに、まずは本書が通常の政治思想(史)の研究書とは相当に趣を異にしているという事実が挙げられよう。もともと科学史・科学基礎論が研究の出発点(「著者略歴」)であった著者自身、本書で「至りついた思想史理解の方法」が「オーソドキシから大きく外れた方法論」と認め、そうして「政治思想史の研究は、かつてまったく縁遠いものであった」(「序文」iv頁)とも述懐している。だが、それだけでは本書の「恐るべき」印象の拠って来る原因の説明にはならない。これに加えるに、この「方法」に基づいて果敢に取り上げられた「主題」の壮大さ、途轍もなさには読者は圧倒されるのだといってよい。おそらく、このようなスケールの大きな主題(それが何であるか、は以下に説明することになるが)を思いつき、それに肉薄していくのにはどうすればよいか、そうしてそれをどのようにしたら、説得的に叙述することが可能なのか、著者は大いに呻吟したにちがいないが、それにしてもこの難題をやすやすとクリアしているような印象を与えもしている。いや、そう断ずるのは著者に対して非礼であろう。読者がいきなり本文に入っても、叙述の迷路に彷徨いかねないのを事前に憂慮して、著者は「序文」、「緒論」において、その主題を明示し、さらに各章の冒頭に立論の構成についてわざわざ触れている。そのことと、本論の主題に関係する三つの「付論」(近年の学説についての解説的批判)、そして最後尾に一括して掲載されている膨大な「注記」の異常な(?)充実ぶりが、実は本書が成立するに

は並大抵の研鑽ではすまなかったであろうことの隠れもない証左のような気がするのである。ついでながら本書は、この種のテーマ世界に昏かったり、それをはじめから忌避する傾向のある人が通読するには相当の忍耐を要するであろう。しかし、そうではない、ある確かな知的センスをもつ読者にとっては、そこに採用された文体、叙述のスタイル、選択された語彙の卓抜さに、ときに魅了され、ときに格気さえ覚えるかもしれない。

1

本書で著者が取り組もうとした主題とはいったい何か。改めてこう問うてみると、いささかのためらいを覚えざるをえない。そこでこういう場合の通例の措置として、まずは本書の全体構成の確認からはじめたい。これに関しては既に若干触れておいたが、以下のようなものである。

序文

緒論 資本主義の債務化と時間信仰

第一章 西欧世界の自律化と二元統治

第一節 メロヴィング朝の興亡と農業革命

第二節 カロリング帝国の分裂と帝権理念

第三節 社会的構造変動の進展と時間観念

第二章 教会改革の政治化と教権支配

第一節 中世的時間収奪の蔓延と封建体制

第二節 主権在神的統治の復興と倫理改革

第三節 聖俗共棲的支配の原像と政教分離

第三章 征服王権の正統化と構造改革

第一節 寓喩的世界創造の構図と時間現成

第二節 ランフランクス神学の神学と首位論争

第三節 時間的信仰態勢の定礎と民族国家

結論 文字言語の世俗化と債務履行

付論一 現象学的人類学の構図と時間問題 (B・

アダム批判)

付論二 社会学的時間論の検討と近代世界 (A・ギデンズ批判)

付論三 文献学的方法論の死角と逆説論理 (H・S・オフラー批判)

さて、「序文」の冒頭で「民族問題への視角については緒論で扱う」と前置きしたうえで(したがって、「民族」の問題が本書の主題であるということがわかる。もちろんタイトルが既にそれを明示しているが)、著者は西欧中世という時代の総体を今日的観点から実感させるための下準備を開始する。著者によれば、この時代の社会常識は「現にあるがままの実情」をそのまま「現実」とみなす現代人のそれとは根本的に異なっている。すなわち、中世人にとっての「現実」とはこの世の眼前で生起する様々な事柄ではなく、それらを超えた神聖で不可視のものである。この現世を超えた神聖で不可視なものこそが現実＝「実在世界」であるとすれば、眼前の現実をなす個々の事象は「実在世界」の「不完全な現れ」、「束の間の象徴」、「単なる記号」でしかない。したがって、かりそめの現世ではなく、死後の来世に眼差しを向けたキリスト教信仰のうちに生きた中世人にとっては、現世の生活は消極的な意味しかもたなくなり、それを来世への転生に向けた準備期間とみなす修道院の生活実践が彼らにとってあるべき生の形を示すことになる。

こうした中世人の心情は我々の理解を超えたものだろうか。著者はここで現代の「実社会」(そこに入る前提として義務教育・高等教育を当然視する社会)を「来世」にスライドさせるだけで、実は現代は中世とよく似た様相を呈するという。つまり、現代でも、実社会に出るに先だって人は教育の場に身を置くが、高等教育が必ずしも成功や幸福の確実な保証とはなりえないにもかかわらず、若い時期のかけがえのない時間を半ば犠牲にして学業に耐えているのは、そのことによってやがて入るべき実社会での成功や幸福に近づくことができるという信仰(?)のためであり、その点において来世に期待する信仰生活を耐えている中

世人とさしたる相違はないという。換言すれば、中世と現代は「来世」＝「実社会」、「天国」＝「裕福で安定した「老後の生活」、「地獄」＝不幸な「生活」、「修道院」＝「学校」という対比構造で捉えることができるというのである。

中世の観念や心性、そしてそこにおける諸事象を今日的観点からの類例や比喻で理解しようとするこの手法は以後の叙述に繰り返し用いられることになる。これは本書に際立った特徴の一つで、「比喻で説明すれば...」、「現代の例でイメージすれば...」というフレーズの多用によって読者は知らぬ間に著者の思考回路に引き寄せられ、その思索世界に同調し、共通体験を味わうことになる。評者などは思わずホイジンガの『中世の秋』をはじめて読んだときのことを想起したほどであるが、それはともかくとして、「序文」の語るところによれば、本書の課題は上述のような西欧中世人の通念が成立するまでの経緯をたどること、十一世紀後半に進展した全社会的規模の構造改革の目指した目的を「時間論」という機軸で明らかにすること、そしてこの改革の過程で「民族国家の祖型」ともいえる統治体制が登場してくるが、「この体制を基礎づけた一人の天才的な神学者の実像に迫ること」だとされる。

2

では、この「一人の天才的な神学者」とは、いったい誰のことか。それはカンタベリー大司教ランフランクスのことであるが、彼の名は次の「緒論」の後半ちかくではじめて登場する。そして、彼こそがノルマン征服後のイングランドを、普遍的な全西欧キリスト教世界から自立させ、一個の独立的な〈運命共同体＝民族〉国家に仕立てあげた立役者であり、その神学思想の果たした歴史的偉業の過程を時間論を中心に据えて解明しようというのが本書の主要な課題ということになる。

ところで、ランフランクスといわれても、一般に西欧中世史に不案内な者にとっては聞いたこともない名前ということになるかもしれない。試みに、我が国の代表的な『西洋史辞典』(東京創元

社)でひいてみると、大略次のように記されている。「カンタベリ大司教。パヴィア生まれ。法学から転じて神学を学び、ノルマンディーの新設ベック修道院に入り、ノルマンディー公ギョーム(のちのウィリアム征服王)に接近、イギリス征服を正当化して教皇の支持を得ることに成功。カンタベリの大司教となり、征服王の腹心として聖俗両面で活動。教会改革を断行し、カンタベリの、ヨーク大司教に対する優位を確立すると同時に、グレゴリウス改革の波をイギリスに入れないように防波堤の役割を果たす。スコラ学者としてベレンガリウスの聖体象徴論に反対し、聖霊化体説を支持。」こういう記述は欧米の場合でもさして変わらない。むしろ扱いはもっと簡単である(例えば、最も権威ある Dictionary of the Middle Ages, vol. VII, 1986, Charles Scribner's Sons, p. 328. を見られたい)。

さて、その名がそれほど人口に膾炙しているとは必ずしもいえない十一世紀の神学者ランフランクスの「実像」に迫ることが本書の課題ということになれば、三章からなる本論の構成のなかで、ランフランク스가直接扱われる第三章(「征服王権の正統化と構造改革」)に最大の頁数(104頁)が費やされているのは当然の話である。しかし、彼の活動した十一世紀後半のクライマックス・シーンに至る前史にも十分な叙述が施されている。すなわち、頁数をみると、メロヴィング朝・カロリング朝統治体制において西欧中世が独自の歴史的個体——教会権威[教皇]と世俗権力[皇帝]という聖俗二権の拮抗関係(対立と共棲)を内在させたところの——として自立する過程を扱う第一章(「西欧世界の自律化と二元統治」)が64頁、次いでオットー諸帝の支配体制瓦解後のドイツ王権を中核とする神聖ローマ帝国と、対抗するローマ教会の「統治」の特質——封建制の収奪システムを「時間」論の観点から分析し、それらと絡み合う教会改革の諸相、とりわけローマ教皇グレゴリウス七世による世界大統合計画——を概観する第二章(「教会改革の政治化と教権支配」)が56頁という具合である。そして、この前二章において仕掛けられた入念な準備作業によって、

本番の第三章の主題——イングランド征服王権にみられることとなる、祖型としての〈民族国家〉の出現——があたかも歴史(中世史)という天空に舞いあがる打ち上げ花火のような観を呈して読者のまえに明らかにされる。そのさい、著者が注目し、それを分析の主要道具とした西欧中世の「時間」観念はここで本書の叙述の流れそのものに重なりあって進行しているかのような錯覚さえ読者に与えている。『時間の民族史』という抜群のタイトルを付した著者の面目躍如というところであろう。

本書の主要内容の梗概だけを予め紹介すれば、以上の通りであるが、その主題と方法が「緒論」の部分で余すところなく語られている。いったいなぜ〈民族国家〉の問題を取り上げるのか、なぜそれが西欧中世の十一世紀でなければならないのか、なぜ教会改革への注目が重大なのか、なぜランフランクスの神学が〈民族国家〉の誕生に直結するのか、そうしてそれらを通底して、なぜ〈時間〉問題への問いが不可避なのか。著者独特の語り口から一応自由になって、「緒論」を要約——本書全体の要約ともなるが——をすれば、次のようなことになる。①民族とは人種・血縁・地縁・文化・歴史、宗教の共通性・単一性に基づく集団ではなく、共通の現在および未来の獲得・解放を志向する「半ば」幻想的な運命共同体である。したがって、未来を先取りし時間を独占する共同体である。②その意味では、西欧中世の信仰生活と現代の国民生活は同型である。前者は「来世」を宗教[教会]によって保証され、後者は国家[国民経済]が国民[民族]の「未来」を支えているという信仰によってともに人びとの未来[時間]が収奪されている。③来世を保証する宗教的権威[教会]が長年にわたる世俗権力によるその政治利用(「来世」の保証を現在において確保する権利・権能=利権の私物化)に対して大規模な反撃を開始するのは十一世紀である。当時の急進教会改革派は私物化された聖なる権能を世俗のすべての権力から奪還し、権能の源泉たるローマ・カトリック(普遍的)教会の頂点から来世の保証すべてが降る一元的・集権的統治体制を目指そう

とした。④この全西欧規模の改革路線（ローマの改革教皇座）と当初歩調を合わせていたノルマンの征服王権は国内の統治基盤を整備するにつれて、改革の原則を堅持しつつ国際関係の推移に即応して大陸から切断された独自の「一国永続改革」へと次第に傾斜していく。それは「来世」を保証する権能に関するかぎり普遍的なローマ教会と結合せざるをえない一方で、教皇の干渉を切断しなければ王国の独立を全うしえないというディレンマの克服を意味する。ランフランクススの神学は聖書と教会法の独自の解釈に基づき、このディレンマを克服した。辺境のイングランド（王国＝教会）は全西欧規模に拡大した「来世」（未来）を保証する権能の争奪戦から一つの〈運命共同体＝民族〉として離陸したのである。民族国家の祖型の誕生である。⑤この常軌を逸した一国改革路線を実感するには、現代資本主義国家の過剰債務化の問題を熟考するのがよい。現代日本では不良化した債権の適切な処理（債務履行）が求められており、その処理なしには半ば幻想化した運命共同体＝国家の未来はないと信じられている。そのため利権の私物化（不良化した債権）がすべて解消されねばならないとされる。しかし、これは本当か？実は、債務（将来にわたる返済の義務）があるということは未来が支配されているということにほかならず、債務者の未来はこれによって予め収奪されている。しかも債務のうち不履行の可能性の少ないものは温存され、かえって停滞する銀行融資の活性化を促すために優良な債権の増加＝優良な債務者の増加が奨励される。つまり、国民が恒常的に優良な債務体質におかれることこそが幻想共同体＝国家の存続の基本条件であって、その条件のうえに国家は運命共同体の守護神として国民の未来を支配しつづけるのである。したがって不良債権処理という掛け声で実際に求められているのは債務体質の完全な解消ではなく、健全なその体質への復帰である。現代資本主義国家存立の秘密はここにあり、完全に債務履行不能の運命共同体はすでに国家となった運命共同体の連帯保証なしには存続しえず、また世界金融資本はこの債権＝債務の関係そのものを否定する〈民族＝運命共同

体〉に対しては、国家となることをけっして公認しないのである。

3

未来を担保にとって現在を支配しつづけること、こうした時間収奪の論理こそが統治の究極の秘密であること（その意味で、現代国家も中世世界も変わりはない）、本書はそのことを西欧中世における「教会改革」——ローマ教会による〈西欧大統合計画〉と、それに対抗して一国永続改革を目指したイングランド（王国＝教会）——を例にとって明らかにしようとした。著者によれば、半ば幻想的な〈運命共同体＝民族〉としての国家はこの中世史の聖俗相争う歴史過程のなかからこそ出現したのであり、現在の民族〔国民〕国家に対する人びと〔国民〕のほとんど不合理ともいえる帰依（信仰）の心性のルーツはまさにそこにあるというのである。したがって、本書のクライマックスはあくまでもこの民族国家の祖型の出現を扱った第三章である。しかし上述のように、この第三章を真に精彩ある叙述にするために、いくつもの仕掛けが前二章には施されている。

この書評の残された、少ない紙幅をどのように用いるのが、最良だろうか。最新の中世史（とくに農業史）の知見に加えて、本領の科学史や論理学、そしてキリスト教の教会史、神学などの知識が存分に動員され、しかも絶えず現在の諸問題の視角から卓抜な比喩や類例——例えば、中世の教会への「寄進・奉仕」を現代の銀行・金融機関への「預金」と、教会への「幼児洗礼」を国家への「戸籍登録」の義務化と、教会腐敗・「教会改革」を金融危機・「構造改革」等々に準える——を用いて進められる本書の叙述を逐一フォローするのは到底困難である。それゆえここでは、最大の鍵観念である「時間」論に限定せざるをえない。それも前二章の議論に言及する余裕はないので、第三章に焦点を絞ることにしたい。

ランフランクススの神学はいったい、どのようにしてイングランド王国を「時間の支配者」にしえたのか。これが最大のポイントである。そこで争

われたイシューはこの章の三つの節に対応して、①ベレンガリウスとの聖体論争をめぐる特殊ランフランクスの時間論、②カンタベリー対ヨークの「首位権論争」にみられる時間論、③一国改革路線の時間論、にまとめられる。

さて、イタリアのロンヴァルディーアを生地とし、当初法学を志していたランフランク스가神学に転身し、フランス（ブルゴーニュ、ノルマンディー）を経て最終的にイングランドに落ち着き、そこを終生の地と定めるに至ったのはなぜか。この内奥の動機ないし理由は当時の政教〔聖俗〕関係の力学のなかで「故郷ロンヴァルディーアの王権が単なる張りぼてにすぎない」（138,140,142,246頁）ことを見せつけられたからである。そこでノルマンディー公ギョーム（のちのイングランド、ウィリアム征服王）との出会いは決定的で両者の利害の一致により、やがてランフランクスは「教会改革によってイングランドを神の国が自らの救済計画を成就するべく天上のイェルサレムへと向かう（教会＝国家）として現成する約束の地」とみなすようになる。その第一歩が聖体に関するベレンガリウスの異端説を断罪することであった。

周知のように、カトリック教会では聖職者が執り行う秘蹟は永遠の現在という聖なる時制に貫かれ、祭壇の前の信者たちはイエス・キリストの贖罪をこの現在時制のもとで体験する。そこで聖餐において信者が与かるパンとワインの意味であるが、それはキリストの体と血が実体と化した聖体であるとするいわゆる「化体説」が正統教義とされていたのである。これに対して、パンとワインはキリストの体の単なる「象徴」にすぎないと主張したのがベレンガリウスである。このベレンガリウス説をランフランクスはどのような論理で断罪したのか。論理学の知見（「両刀論法」、「ディレンマ」、「排中律」など）を導入して説明する著者の分析叙述はここで鮮やかである。それを簡潔に要約するのは至難であるが、ランフランクスの論駁は著者のいう「時間の存在論的現成の構図」という論理で説明しようという。すなわち、もともと聖体論は二つの主張——記号化すれば、[A]祭壇のパンとワインは単に聖体である。[B]祭

壇のパンとワインは単にキリストの真の体と血である。——のうち、いずれが正しいか、を争うものである。ベレンガリウスの論理——もしも[A]ならばパンとワインは存在している（大前提1）。もしも[B]ならば、パンとワインは存在している（大前提2）。しかるに、聖別の前後をとともに考慮しても、[A]か[B]かのいずれかであり、それ以外はありえない（小前提）。ゆえに、パンとワインは（常に）存在している（結論）——は厳密な演繹論理の基本形式になっており、これに基づいて正統説（化体説）が批判されるわけである。これに対するランフランクスの駁論の論理形式はつまるところベレンガリウス説が「聖別の前後」という現世的な時間——秘蹟では永遠の現在しかない！——を暗黙の背景としているという点を突くことである。そこで、彼の主張は記号化した表現を用いれば、《[S]（祭壇のパンとワイン）は[P]（聖体）かつ[not P]（キリストの体と血）であり、しかも両者のいずれでもない》ということになる。この常識では到底理解しがたい論理構成は過去、現在、未来の時間が「永遠の現在」において共に成就するとみなす教会の正統的時間観念を想起し、それを円筒形の物体として考えると、了解可能となる。つまり、円筒形の事物は真上（または真下）から見れば、「丸い」が、それ以外の角度から見れば、「丸くはない」のであり、こういう円筒形の比喻で「聖別後のパンとワイン」を考えれば、[S]は[P]かつ[not P]であり、しかも両者のいずれでもないということになるのである。

過去（救済の約束）・現在（信仰）・未来（約束の成就）が永遠の現在において共に現成する——こういう時間観念によって、ランフランクスはベレンガリウス説を撃破したが、これと通底する思考枠組みでイングランドの二大司教座（ヨークとカンタベリー）における前者に対する後者の首位権も主張されている。彼によれば、〈全教会＝全キリスト教社会〉の首位権がローマにあるのと同様に、全イングランド〈教会＝信仰共同体〉の首位権もカンタベリーが保有しなければならない。秘蹟の力は断固として唯一無二の首位大司教座

(カンタベリ) から降るのでなければならないのである。ヨーク大司教トマスとの論争で用いられたランフランクスの論理はこれとつまるどころ「存在論的・寓喩的現成の構図」と呼べるもので、グレゴリウス大教皇の布教計画に示された創造主の意思がカンタベリのうちに寓喩的に現成しているというものである。「聖体」も「叙階」も人知を超えた神の業を通じてこそ成就するというのが彼の論理にほかならない。

こうして残された課題はグレゴリス七世教皇の教会改革＝全西欧規模の世界統合計画からのイングランド〈王国＝教会〉自立の正当化（一国改革路線）ということになる。扱われている史料は、主としてイングランド王（ウィリアム）に対してなされた教皇からのピーターズ＝ペンス（ローマ教皇座への上納金）支払いの要請とそれに連動する教皇への服従要求に対する対応、そうしてウィリアム王の継承者ルフスによる反王運動の中心人物、ダーラム司教サン＝カレの断罪問題への加担である。このいずれに関しても、ランフランクスの主張は時間の存在論的現成の論理に貫かれている。すなわち、封建的な慣習を根拠とする教皇側の要求（上納と服従）に対して彼はまさしくその封建的規範を逆手にとって、二つの要求を分断し、上納は承認する一方で、服従はこれを拒否する。この切断即補完の論理によってイングランド王国はローマ教会の霊的な中心からの干渉を排除し、単一の教会として離陸したのである。サン＝カレ断罪法廷におけるランフランクスの論理もこれと同断であり、要するに、現世の時間軸に沿って自己の無罪を主張するサン＝カレに対して、彼は「教会法の永遠性」（永遠の現在を体現する教会権威）と「王国の時間的至高性」（現世の時間において裁治権を行使する王権）という二つの根拠を巧緻に操りつつ、断罪しえたのであった。聖と俗の「切断即補完」という混成的な二元性で成り立つイングランド〈王国＝教会〉がここに「選ばれた民の時間的な国家」として出現することとなったのである。

以上、本論のごく中心部分だけの紹介を駆け足でおこなった。それは文字通り表層的な「紹介」でしかなく、「書評」とはなりえていない。そういう自覚のもとに言及できなかった諸問題のうち、大急ぎで三つの点だけを記しておきたい。一つは、同じ著者による『時間の政治史 — グレゴリウス改革の神学・政治論争』（岩波書店、2001年）が併せて読まれるべきだということである。そこでは西欧十一世紀のグレゴリウス改革に集中する「神学＝政治論争」における三つの主題——ベレンガリウスの聖体説、ペトルス＝ダミアノの改革思想、そしてランフランクスの神学——がそれぞれ独立の章を割いて十分に論じられており、本書はその点ではこの書の続編ともいえるべき性格をもっている。二つは、本書の「結論」の最後尾でさりげなく語られている著者の思想史理解についてである。著者によれば、思想史研究とは「過去の「客観的(?)」な事実を確定する作業」ではなく「未来の解放にむけられていた歴史の貴重な遺産から、われわれ自身がこの研究分野をつうじて学んでいく」ことだというのである。〈幻想共同体〉としての〈民族〉とは何か、それはどこから来て、どこに向かうのか、あえて一言で言い切れば、これが本書の主題であるが、この根本の問いの果てに、「装いを変えた〈幻想共同体〉」として著者が見ているものは「生命科学」（ヒトゲノムの解読を終了し、死者の復活ならぬ、生命の復活や創造を視野に入れている）のようである。というのは十一世紀改革教皇座による人類普遍の救済計画（グレゴリス教皇の世界大統合計画）と、そこから離陸した〈幻想共同体＝民族〉国家との関係に相当するものは、現代では科学技術（改革信条、歴史、文化、宗教の違いを貫通し、ラテン語にかわる普遍言語＝数学と世界共通の研究パラダイムを用い、領土的野心から決別して人類普遍の公益を謳う）と、その一分枝たる生命科学（この科学技術の研究態勢から、世界金融資本と「切断即補完」の関係で自立する可能性のある先端一領域）の関係だからである。三つは、「国民〔民

族」とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」(『想像の共同体』)というB・アンダーソンのテーゼと本書はどこかで親和性があるのではないか、という点である。アンダーソンは人類学の成果などをもとに、あらゆる共同体が「想像の共同体」であること、しかし「国民」という共同体と、それに先行する二つの共同体(「宗教」共同体と「王国」共同体)とでは時間観念が異なっており、例えば中世では「いま」と「ここ」という現在時は過去と未来から切断された単独の時ではなく、過去・現在・未来が一つの聖なる宇宙の摂理的全体として、人びとを救済する「メシア的時間」(W・ベンヤミン)と捉えられていること、そして「国民」という新しい共同体はこの「メシア的時間」・同時性の時間観念が経済的变化や社会的・科学的な諸発見(世俗科学)の発展、コミュニケーションの加速などによって衰弱していく過程のなかから出現したものだ」と主張した。民族の問題を「時間」論の文脈で追求する本書のどこかに、アンダーソンの問題意識が共有されているような気がするが、どうだろうか(もっとも、最新の「時間論」に関しては、「付論」が大いに参考になる)。

だが、こうしたことの逐一についてこれ以上触れるのは現在評者のおかれている公私の状況から不可能である。与えられた紙幅を既に大幅にオーバーしているが、一身上の弁明に便乗して、最後にあえて余計なことを書く。このところ評者は勤め先での雑事の間を縫ってトマス・アキナスのある小品の邦訳に従事しているのだが、古典の一テキストを読みつつ、その翻訳を試みるというこの単純作業だけで疲れ果て、一向に進捗しない日々を送っている。疲れ果て、というのは肉体的な面のことではなく(もちろんそれもあるが)、翻訳という作業そのものの孕む学問的課題の本質にかかわってのことである。語彙の理解、それを取り巻く文脈の理解、そうしてそれらすべてを包括する思想家の思想の全体的理解、そのようなテキストの奥深い森のなかに分け入って迷わず、再び入り口に戻り帰って、しかもその森全体をあたかも俯瞰しうるかのごときしぐさで森の内部の細

かな様相を馴染みの言語(日本語)に表現し直す、この作業だけで手一杯なのである。いってみれば、このような完結した作業が評者のこれまでの政治思想史研究のやり方であって、ある時期のある思想家の政治思想(と思われるもの)のパラダイムを主要作品の解説を通していまに再現することだけが辛うじて可能となる(?)たぐいのものでしかない。いささか自嘲げみにいうのだが、実際のところそうとしかいえないのである。

そうしたことを考えると、本書の営為はやはり飛び抜けて壮大なものというべきであろう。推測でしかないが、博学多識の著者はランフランクスに関する上掲の辞書的知識程度はまえもって十分にもっていたであろう。しかし、そこから本書を成立させることの間には、相当の距離が介在しているはずである。つまり、著者の尋常ではない知的な想像力はランフランクスという一人の特異な神学者を中世史のキー・パーソンと認定し、その外的活動(法律から神学への転身、バック修道院の体験、ノルマンディー公ギョームとの関係、カンタベリ大司教職など)と、その神学思想(教会改革、ベレンガリスとの聖体論争、カンタベリ首位性の主張など)というさしあたり別個の、二つの営みの間に、ある有機的な関係が潜在していることを敏感に突き止めて、その内的な構造を鋭く抉り出ただけではない。さらにその関係構造が十一世紀西欧世界とそこに至る歴史(中世史)のなかで果たした政治思想史的意味と意義(ノルマン征服およびイングランド王国独立の正当化)にまで言及し、そうしてその一連の歴史過程を見事な筆力で現在に鮮やかに蘇らせたのである。こうしたことは並の研究者のなしうることで到底ありえない。真に知的な臂力の発露といってもよいであろう。

研究会記録

日韓政治思想学会第2回共同学術会議

「日本と韓国の近代化過程における宗教の問題」

International Symposium: The Problem of Religion in the Modernization Process in Japan and Korea, 2003.

会期：2003年7月20日～7月21日

会場：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード
タワー 26F スカイホール

主催：政治思想学会（日本）・韓国政治思想学会

後援：国際交流基金アジアセンター

プログラム

7月20日（日）

1 民間信仰について 10：00～12：00

司会：飯田泰三（法政大学）

報告：呉文煥（延世大学校）：「東学 — 儒学と
西学に対する一つの対案」

川田稔（名古屋大学）：「日本の近代化と
民間信仰 — 柳田国男氏神信仰論」

討論：朴鴻圭（高麗大学校）

橘川俊忠（神奈川大学）

2 キリシト教について 13：00～15：00

司会：加藤節（成蹊大学）

報告：柳鍾善（蔚山大学校）：「朝鮮末期におけ
るカトリック運動と権威の問題」

清水靖久（九州大学）：「日本のキリシト
教と政治的権威」

討論：崔丁云（Seoul大学校）

本田逸夫（九州工業大学）

3 儒教について 15：20～17：20

司会：和田守（大東文化大学）

報告：安外順・具沅列・梁承兌（梨花女子大学校）：「
朝鮮後期の丁若鏞の思想に表れた儒教

と天主教 — 『近代』の促進と遅滞」

大久保健晴（東京都立大学）：「明治初期
知識人における宗教論の位相 — 西周と中
村敬字を中心に」

討論：張寅性（Seoul大学校）

伊藤弥彦（同志社大学）

7月21日（月）

4 女性と宗教について 10：00～12：00

司会：中村敏子（北海学園大学）

報告：朴義卿（成均館大学校）：「韓国女性の近
代化とキリシト教」

関口すみ子（東京大学大学院）：「女権・
廃妾・廃娼 — 明治の女性解放運動とキリ
シト教」

討論：金秉坤（高麗大学校）

菅野聡美（琉球大学）

5 仏教について 13：30～15：30

司会：栄沢幸二（専修大学）

報告：羅禎源（江原大学校）：「韓国の近代化と
仏教」

野村真紀（北海道大学）：「近世日本にお
ける儒仏一致論とその展開」

討論：張鉉根（竜仁大学校）

梅森直之（早稲田大学）

論文公募のお知らせ

学会誌『政治思想研究』の編集委員会では、第5号の刊行（2005年5月予定）にむけて準備を進めています。つきましては、それに掲載する論文を下記の条件・要領にて公募いたします。多数のご応募を期待します。

- 1 応募時点で、応募者が本会の会員であることを条件とする。
- 2 応募論文は未刊行のものに限る。但し、インターネット上で他者のコメントを求めるために発表したものはこの限りではない。
- 3 応募希望者は、可能な限り2004年6月末までに、応募しようとする論文の題目と内容の要旨（A4用紙1枚程度）を下記の編集委員会宛に送付して、予め応募の意思を示すことが望ましい。雑誌刊行に支障をきたさないために事前に応募状況を把握しておくことが、必要であるためである。但し、この手続きを踏んでいない場合でも、下記の締切までに応募した論文は受け付ける。応募の意思を表明した者に対しては、編集委員会から「応募用紙」と「フロッピーデータ内容連絡表」（下記参照）を送付する。
- 4 原稿の締切は2004年8月31日で、厳守する。提出先は以下の通りである。

560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-31

大阪大学大学院国際公共政策研究科

米原謙研究室気付

『政治思想研究』第5号・編集委員会

- 5 応募に際しては、学会事務局ないしは編集委員会で用意している「応募用紙」（本学会ホームページにおいても提示している）に所定の事項を記入の上で、A4用紙1枚程度のレジюмеを添付した論文2部を提出する。応募用紙の執筆者欄には、氏名・生年・博士以上の学位・現職・主要業績数点（論文の場合は掲載雑誌名と巻号及び刊行年月、著書の場合は出版社及び刊行年）を150字以内で書くものとする。但し、

提出していただく論文2部には、公平を期するために、著者名を記載せず、また注記においても著者名が明らかにされないように注意していただきたい。

- 6 原稿の字数は、注を含めて32000字以内とする。（厳守のこと）。ワープロ、コンピュータを使用する場合は、1行30字、1ページ20行で、行間を広くとってプリントアウトする。『政治思想研究』は横組みなので、原稿も横組みが望ましい。打ち出した原稿にフロッピーを添えて提出するものとするが、使用機種・使用ソフト名をラベルに明記の上で、オリジナルの原稿ファイルを加えてテキスト形式のファイルも添付すること。手書きの原稿も可とするが、ワープロ、コンピュータ原稿が望ましい。

フロッピー入稿時の注意

- (1) フロッピーの入稿に際しては、学会事務局ないしは編集委員会で用意している「フロッピーデータ内容連絡表」に記入の上、添付すること。
- (2) 改行の場合は、必ず改行マーク（通常はリターン・キー）を入れること。見た目だけの改行では、改行と認識されないので注意すること。
- (3) テキスト形式の場合、外字・記号・文字装飾情報は含まれないので、それらに関しては、プリントアウトした原稿に朱書きで明示すること。パソコンやワープロで出力できなかった特殊な漢字や記号についても同様である。
- 7 見出しは、大見出し（ローマ数字Ⅰ、Ⅱ・・・）、中見出し（アラビア数字1、2・・・）、小見出し（(1)、(2)・・・）を用い、必要な場合にはさらに小さな見出し（i、ii・・・）をつけることができるが、章、節、項などは使わないこと。
- 8 注は、各見出し毎に(1)、(2)・・・と付し、プリントアウトしたものに朱書きで明示するこ

と。

9 引用・参考文献の示し方は以下の通りである。

(1) 洋書単行本の場合

K. Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, 1953, S. 75-6. (高木監訳、『経済学批判要綱』(1)、大月書店、1958年、79頁)

(2) 洋雑誌掲載論文の場合

E. Tokei, Lukacs and Hungarian Culture, in *The New Hungarian Quarterly*, Vol. 13, No. 47, Autumn 1972, p. 108.

(3) 和書単行本の場合

丸山真男『現代政治の思想と行動』第2版、未来社、1964年、140頁。

(4) 和雑誌掲載論文の場合

坂本慶一「ブルードンの地域主義思想」、『現代思想』5巻8号、1977年、98頁以下。

(5) テキスト形式の場合

イタリックの書式情報は認識されないので、プリントアウトのものに赤のアンダーラインを引いて明示すること。

10 応募論文は、編集委員会において外部のレフターの評価も併せて慎重に審査した上で掲載の可否を決定する。応募者には可否の結果を通知するが、公平を期するために不採用の者に対しては評価の概略を通知する用意がある。また編集委員会が原稿の手直しを求めることもある。なお、応募原稿は返却しない。

11 校正は印刷上の誤り、不備の訂正のみにとどめ、校正段階での新たな加筆・訂正は認めない。

12 応募論文が本誌に掲載された後に他の刊行物に転載される場合は、予め編集委員会に転載許可を求めることとする。また、転載にあたっては初出が本誌である旨を明記するものとする。

13 なお、応募論文が本誌に掲載された場合、原則として同時にホームページ上でも公開されることになる。その点についても予めご承諾いただきたい。

以上

『政治思想研究』編集委員会

理事会議事録

2003年度第2回

2003年10月4日 尚美学園大学

出席者：飯島昇蔵、飯田泰三、加藤節、亀嶋庸一、川崎修、菊池理夫、権左武志、鷺見誠一、関口正司、添谷育志、千葉眞、寺島俊穂、萩原能久、平石直昭、藤原孝、松本礼二、柳父圀近、米原謙、渡辺浩、和田守

1) 各種委員会報告

編集委員会主任の千葉理事より、『政治思想研究』第四号の論文公募では例年以上に多数の応募があったこと、ニューズレター担当の亀嶋理事より、17号の編集作業が順調であること、それぞれ報告があった。

2004年度研究会の企画委員長の平石理事からは、研究会は2004年5月29、30日の両日、東北大学法学部で開催し、統一テーマは「冷戦後の世界の思想変容」とすること、「民族・宗教・戦争」「人権と市民社会」「グローバリゼーションと社会主義」の三つのセッションを設けて、報告者等の人選を進めているが、一部に未確定要素が残っており、11月発行のニューズレター誌上で確定プログラムを示す予定であること、また海外から極めて著名な研究者を招聘すべく交渉を進めたが、いずれの候補とも日程等の関係で折り合いがつかず今回は実現困難となったことが報告され了承された。そこで翌2005年度の研究会では是非とも招聘を実現すべく、2005年度の企画委員会を現時点から発足させ十分に時間の余裕を持って交渉に当たらせるべしとの指摘がなされ、企画委員の選任は代表理事に一任されることとなった。また、会員の場合、報告者旅費等については国内外を問わず支給しないという従来の方針が確認された。

なお、2004年度研究会の自由論題セッション担当の柳父理事より、以下の報告があり、了承された。すなわち、自由論題での報告応募者は6名あったが、うち1名は応募申込み時点で学会員で

はなく、応募資格があるか否かが問題となり、これについて代表理事、編集委員会主任、企画委員長とも相談の上、応募要件としては「応募時点で会員であることを要する」との理解にたってこれを却下し、当人からも了承を得た。残り5名については形式的要件を満たしているため、レフリーの審査を仰ぎ、全員について応募を受け入れることとした、というものである。

2) 日韓共同学会議の件

7月に日本で開かれた日韓共同学会議につき、同会議における学術交流は本学会の研究会への海外報告者の招聘とは性質が異なるものの、同会議のペーパーの出版費用及びアルバイトの件費に限っては予備費から24万円程度支出して補助することとしたい旨、加藤代表理事より提案され、同会議担当の飯田理事から事情の説明があった後、承認された。

3) 会計年度の件

今年度末より予算・決算理事会を3月に開催すること、それに伴い会計年度を3月1日始まりに変更することが代表理事より提案され、承認された。

4) 理事及び代表理事の選出方法の件

理事の選出方法につき、小野理事・斎藤理事・加藤代表理事からなる委員会での検討を踏まえ、従来の選任慣行の継承を基本とした上で、年齢等の制限を設けるべく、理事候補選出に関する申し合わせを決定したい旨、代表理事から提案があり、議論の結果、原案を一部修正した上で承認された。つづいて代表理事の選出方法につき、代表理事から選出規定案が示され、一部修正の上、承認された（「政治思想学会理事候補に関する申し合わせ」「政治思想学会代表理事選出規定」は別掲）。

5) 新入会員の件

次の八名の入会が認められた。

上田耕介、瀬戸一夫、銭 昕怡、崔 炳一、中山菊夫、福野明子、松沢広樹、山口太郎

理事候補・代表理事選出規定

「政治思想学会理事候補選出に関する申し合わせ」

- (1) 理事改選年の3月31日をもって満62歳に達する者および代表理事経験者は、原則として理事候補としない。
- (2) 理事候補の決定に当たっては、専門、地域、年令、性別等に配慮する。
- (3) 理事の定員についてはこれを特に定めない。ただし、候補の総数は概ね現行の理事数を目安とする。
- (4) 理事候補の決定は、理事改選年の3月に理事会を開催して行う。
- (5) 本申し合わせは、2003年10月4日に発効する。

(注意：(1)の項目に「原則として」とあるのは、研究会開催校担当理事の選任の場合を念頭に置くものである旨、代表理事から説明があり、了承された)。

「政治思想学会代表理事選出規程」

第一条 代表理事は理事会において互選する（政治思想学会規約第7条による）。

第二条 理事会において、代表理事に立候補した者、または推薦された者について投票を行い、過半数の票を得た者を代表理事とする。

二 投票の結果、過半数の票を得た者がいない場合、上位二名について再投票を行い、上位の得票者を代表理事とする。

三 再投票による得票が同数の場合は、抽選によって代表理事を決定する。

第三条 代表理事の選出を議案に含む理事会は原則として10月に開催するものとする。

二 理事は、同理事会を欠席する場合、他の理事に議決権を委任することができる。

第四条 本規程は、理事の3分の2以上の同意がなければ改廃することができない。

付則 本規程は2003年10月4日に発効する。

(注意：2003年度に関しては、代表理事の選出を議案に含む理事会は2004年3月に開催される。)

2004年度研究会プログラム（予定）

第11回政治思想学会研究会

期日 2004年5月29日、30日

会場 東北大学法学部

統一テーマ 「冷戦後の世界の思想変容」

5月29日（土）

第一セッション 「民族・宗教・戦争」

司会 平石直昭

10:00-10:40 亀嶋庸一

「20世紀の思想変容とその後（仮題）」

10:40-11:20 千葉 真

「米国における政治と宗教」

11:20-11:30 休憩（質問とりまとめ）

11:30-11:50 五十嵐暁郎 コメント

11:50-12:00 両報告者からの応答

12:00-12:30 フロアからの質問への応答

12:45-13:45 理事会

第二セッション 「人権と市民社会」

司会 添谷育志

14:00-14:40 山岡龍一

「反基礎づけ主義的人権論の可能性（仮題）」

14:40-15:20 岡野八代

「荒野における人権—人権理念の限界/可能性」

15:20-15:30 休憩（質問とりまとめ）

15:30-15:50 富沢 克 コメント

15:50-16:00 両報告者からの応答

16:00-16:30 フロアからの質問への応答

17:00-19:00 懇親会（生協食堂）

5月30日（日）

自由論題セッション

分科会A 司会 岡本仁宏

10:00-10:25 片山文雄

「Doing Good to "the Whole" と『ネ

ーション』—ベンジャミン・フランクリンの政治思想—」

10:25-10:50 井上弘貴

「ジョン・デューイとラインホルト・ニーバーとの政治論争をめぐる一考察」

10:50-11:00 休憩（質問とりまとめ）

11:00-12:00 フロアとの質疑応答

分科会B 司会 川崎 修

10:00-10:25 北村 治

「カントの国際政治思想の現代的位相—民主制による平和と世界市民—」

10:25-10:50 黒宮一太

「土地への帰属・記憶への帰属—Hannah Arendtのネーション論と現代ナショナリズム研究におけるネーション論の比較考察から—」

10:50-11:15 池 亨

「『政治』の擁護者バーナード・クリックの政治理論—シティズンシップと教育論との関連において—」

11:15-11:25 休憩（質問とりまとめ）

11:25-12:30 フロアとの質疑応答

理事会 12:30-13:30 理事会

第三セッション 「グローバリゼーションと社会主義」

司会 杉田敦

14:00-14:40 川原 彰

「『グローバルな市民社会』と政治理論—グローバル・デモクラシーの構成的次元（仮題）」

14:40-15:20 的場昭弘

「グローバリゼーションと社会運動（仮題）」

15:20-15:30 休憩（質問とりまとめ）

15:30-15:50 緒形康 コメント

15:50-16:00 両報告者からの応答

16:00-16:30 フロアからの質問への応答
(終了)

編集後記

本学会の事務局を担って下さった福田有広氏が急逝された。次代の政治思想史研究を支えるべき傑出した才能が失われたことに、無念の思いが強い。日本のヨーロッパ政治思想史研究が国際的水準にあることを若くして実証された氏の足跡を偲びながら、私どもも、氏が目指されたそうした方向を継承しなければと思う。短い人生を輝きながら鮮烈に走りぬぎ、志半ばで逝った氏の御冥福を心からお祈りしたい。

代表理事 加藤 節

2003年12月8日発行 発行人 加藤節 編集人 亀嶋庸一
政治思想学会事務局（暫定） 〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1
成蹊大学法学部亀嶋研究室内 Tel: 0422-37-3623 Fax: 0422-37-3876（学部共同）

会員業務（入会・会費納入・名簿記載事項変更・会報発送・学会誌発送販売）
（財）日本学会事務センター政治思想学会係 〒113-8622 東京都文京区本駒込5-16-9
Tel: 03-5814-5810 Fax: 03-5814-5825
学会ホームページ: <http://www.soc.nii.ac.jp/jcspt/>